

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

vol.70

Topics

「光琳を慕う—中村芳中」

所蔵作品展「春爛漫—千葉市美術館所蔵版画100選」





「犬も歩けば棒に当たる」という喩えがあります。江戸時代からの「いろはかるた」の第一句にあるのをご存知でしょう。何かをやっているうちに、思わぬところで、幸運に出会うことがあると言った意味でしょう。

昨年の11月、わたしは、スコットランドのエジンバラに調査旅行をしました。目的は、そこにあるスコットランド国立博物館所蔵の仏教美術を調べることでした。同館の日本美術担当の主任学芸員であるロジーナ・バックランドさんとは、彼女が博士論文を書くために日本に留学していた時期にいろいろと研究上のアドバイスをすることがあったという関係があります。事前に調査依頼をメールでしたところ、彼女が企画した「役者絵の特別展を見て欲しい」、それから「同市の中央図書館に、自分が興味をもっている江戸時代の絵画が数点あるので一緒に見てもらえないか」という返事が戻って来ました。

わたしたち美術館で学芸的な仕事に携わっている者、とりわけ学芸員は、美術館での展覧会の企画や展示を常に準備することを仕事とし、あるいはそのために相当前から事前の準備、有体と言えば、そのためのアイデアの源泉を蓄えることに心がけ、それをいつも考えています。そういう者にとっては、どんな時でも、どこに居ても、実はそのチャンスに出会う機会を窺って不断的努力を重ねているのです。

わたしはこの美術館に来て、間もなく3年になろうとしています。大学に入ったころから美術館の仕事に関心を持っていました。しかし、運命の悪戯か、自分自身の努力が足りなかったのか、長く大学での教育と研究の仕事をする事になってしまいました。いまは、経験の浅い学芸員と思って、オリンピック選手たちの言を借りれば、最善を尽くし、「楽しんで」やっています。

わたしたちの美術館、千葉市美術館で学芸の仕事をする職員たちは、ご来館下さる市民の皆さんにご満足を頂けるような展示を、また様々な情報を提供できる場として、同時に、市外からお越しになる鑑賞者の方々にも、「面白かった」と言って頂けるよう意を凝

らしています。

学芸員は、ものの本質を究め知り、自ら理解するところ、解釈を加えるところを、正しく、解かり易く人々に伝えようとしています。ですから、それは社会教育の担い手として、学校での教育とは少し違いますが、ある意味で、研究と教育に携わる専門職集団であると言えるでしょう。

前置きが本文よりいささか長くなりましたが、冒頭で述べた「棒に当たった」、つまり、思い掛けなくすばらしく、また興味深い作品に出会ったお話をします。

実はわたしは、江戸時代の末期に活躍した狩野^{かすのぶ}一信(1816-63)という絵師の描く「五百羅漢図」(東京芝・増上寺蔵)を、今から30年以上前に紹介したことがあります。1セットが全部で100幅、描法に西洋の陰影法を使うなど、極めて特異であるところに着目したのですが、そのころは差たる反響もありませんでした。ところが、最近、山下裕二さんや安村敏信さんらによって、今日の鑑賞の目に相応しい、新しい光が当てられたことで、俄かに注目にされることとなり、2011年には江戸東京博物館で大きな展覧会も開催されました。一信は、仏画を得意する、なかでも羅漢図に評価の高い優れた作品を残す絵師とされています。わたしが一信に出会ったころは、増上寺に伝わる前記の羅漢図のほか、先般、千葉市美術館で開催された「仏像半島」展に、成田山新勝寺様からご出品頂いた「釈迦三尊十六羅漢図」など数点が知れている程度でした。

その後、前述のお二人のほか、研究者や美術館学芸員たちによって数十点の一信画が世に知られる様になりました。それらの作品を見ると、一信は活躍の最初から仏画を専ら描いていたのではなく、はじめは日本の古典物語や中国に由来する吉祥、繁栄などを隠喩する画題を描くことが、多かったのではないかという推測がわたしにはありました。それを裏付けてくれるような作品が、エジンバラの図書館に所蔵されていたのです。

図版に載せる「一信製」の款記のある「唐子図」と「顕幽斎画」の款記を持つ「平家物語一の谷合戦」の一場面を描いた二図がそれで、



(左から) 狩野一信《唐子図》、狩野一信《平家物語一の谷合戦図》、鈴木其一《朝顔図》、岡本秋暉《蓮に翡翠図》 いずれも安政3年頃 エジンバラ中央図書館蔵

ほぼ色紙ほどの大きさで、画冊に貼り込まれています。さらに興味深いことには、同じ画冊には、岡本秋暉、鈴木其一、柴田是真といった幕末に活躍する代表的な画家のほか、明治時代に南画界の重鎮となる瀧和亭のごく若いころの作品も含まれています。また、山東京伝の弟である山東京山(1769-1858)の八十八歳(安政3年/1856年)の署名がある、「寿 心平自長」と白楽天の詩の一節を墨書した作品も見出せます。誰か、社会的にも相当の力をもった人物による注文でこの画冊は制作されたのでしょうか。一信は、当時の江戸市中で下町文化を担う、一流とされた絵師たちに伍して画冊制作に参加していたのです。一信を、仏画を巧みに、個性的に描く、

いわば職人的な絵師と見做していたわたしの考えは、この作品との出会いによって問い直させられることになりました。様々な機会に思いもよらない、驚きや発見があるものです。美術の鑑賞者、美術の勉強をしようと心がけ、それに興味の目を注ぐ者たちには、幸いなる機会が与えられるのだと、日ごろの反省込めて、改めて思える良い経験になりました。

[館長 河合正朝]

光琳を慕う Hōchū meets Kōrin 中村芳中

■指頭画とたらし込みと芳中と

中村芳中(?-1819)は「指頭画」を描いていました。芳中が尾形光琳(1658-1716)の画風と結びついて語られるのは『光琳画譜』出版の享和2年(1802)頃からのことです。光琳風以前の芳中は指頭画を描く人として知られていました。

指頭画は指墨とも指画とも呼ばれ、通常用いる筆ではなく、指や爪、時には掌などを使って描く絵のことです。筆を用いない手法として、中国では唐時代の逸品画家(格付け外の変った画家)による墨を潑いでかたちをつくる潑墨なども行われました。王黙は頭髪に墨を付けて描いたといいます。その後清時代になって高其佩が指で宋代元代の名画を模したり、様々な画題を描いたりして指頭画の名手として知られました。

江戸時代中期、初期文人画の画家柳澤淇園、江戸で沈南蘋の画風のさきがけとなった黒川亀玉など、中国風の絵、唐画の画家たちによって日

本でも指頭画が描かれます。特に池大雅(1723-76)は指頭画を多く残しました。大雅は黄檗僧を通じて指頭画に関する情報を得たとも、また朝鮮通信使の画員として来日した崔北が指頭画を席画として披露するのを見たとも考えられています。池大雅「柳溪渡渉図」(図1)は『八種画譜』の『唐解元倣古今画譜』中にある川を渡る人物を描いた図をもとに橋、遠山を付け加えたもので、爪と指で描かれたものです。柳の葉には墨のにじみが生かされています。芳中の文人画風の山水は大雅の画風に近く、『逢原紀聞』には芳中が大雅の妻玉瀾から聞いた大雅の逸話があり、芳中は大雅に師事した可能性があります。芳中の指頭画(図2)も大雅に由来するのかもしれませんが、木村兼葭堂も絵を大雅に学んでいるので、兼葭堂周辺で芳中の指頭画は喜ばれたと思われるます。

大雅は席画として、すなわち人前のパフォーマンスとして指頭を披露していたようです。芳中も席画として指頭画を描いたでしょう。平賀蕉斎が『蕉斎筆記』に「鳳中指頭画 大坂より登る」と記したのは竹田定訓の京都で円山端の寮で開いた会でのことでした。



(図1) 池大雅「柳溪渡渉図」
延享3年(1746) 千葉市美術館



(図2) 中村芳中「山水図」(『奉時清玩帖』より)
個人蔵 寛政7年(1795) ★



(図3) 中村芳中「白桃図扇面」 個人蔵 ★
※「以煙管」とある。

※作品キャプション内の★は本展出品作品です



(図4) 尾形光琳「四季草花図」部分 個人蔵 宝永2年(1705) ★

芳中は指だけでなくいろんなもので描いています。芳中は「白椿図扇面」(図3)を煙管で描いたと画中に記しています。芳中の指頭画を画帖に集めた松本奉時にも煙管で描いた例がありました。芳中は更に盃、卵(の殻?)でも描きます。指、煙管、盃、卵で描かれた絵はその場に居合わせた人々がかたちの出現する場を共有して楽しんだことでしょう。

次はたらし込みについてみることにします。芳中の光琳風はたらし込みの技法と結びついていました。「たらし込み」は水墨で草花を描いた中国絵画の影響を受けて金銀泥絵から俵屋宗達が生み出したと思われる技法で、濃度の異なる墨または絵の具、金銀泥をにじませてできるむらを生かして、対象の質感、立体感を表現します。尾形光琳も「四季草花図」(図4)等で草花の葉に墨のたらし込みを用いていました。深江芦舟や立林何帛は恐らく光琳の画風としてたらし込みを受け継いでいます。芳中のたらし込みは質感、立体感を表すための手段というより、時にはたらし込みそのものを見せることが目的のように思われます(図5)。

芳中とほぼ同時期に江戸で光琳風の絵を描いた酒井抱一(1761-1828)のたらし込みは作品にもよりますが、芳中と比べてずいぶん控えめです(図6)。抱一とその弟子たちは光琳風の絵画を多く描き、後に江戸琳派と呼ばれることになります。江戸琳派の酒井道一(1845-1913)のたらし込み(図7)もおだやかです。江戸琳派の画風を取り入れた鈴木鶯湖(1816-70)の作品(図8)にも木の幹や藪柑子の葉にたらし込みがみられました。

たらし込みは琳派の画家だけではありません。円山応挙(1733-

95)も時にはたらし込みを用いました。「富士三保図屏風」(図9)の山肌、空には墨のたらし込みをみることができます。応挙の弟子長沢芦雪による「松竹梅図」(図10)にもたらし込みに近い表現があります。松、梅の幹は墨に白緑を載せ、竹、松の葉には墨に緑を載せ、部分的にはたらし込みといえそうです。箱に「光琳寫」とあるのも納得できます。

大雅もたらし込みをすることがあり、指頭画と併用しています。たらし込みは効果を高めるために紙に礬砂(どうさ)を引くなどして丁寧に画室で行われただけではなく席画としても行われました。たらし込みと指頭画は観衆の前にしたパフォーマンスとして近い行爲です。大雅と親しかった曾我蕭白が「牧牛図」(旧永島家襖絵、三重県立美術館)などで指頭画を、「松鷹図」(旧永島家襖絵、三重県立美術館)ではたらし込みをしているのも、依頼者の前での席画に近い作業だったのかもしれませんが。

芳中「山水図扇」(図11)に表れる、墨に緑をたらし込んだ樹木は偶然に生じたかたちを生かしたように見えます。そうであれば中国の宋から元にかけて活躍した玉潤(ぎょくかん)が得意として室町時代の雪舟が受け継いだ、墨を潑いでできる染みやにじみに意味づけをする潑墨と近い方法で、筆法によらないという点では指頭画と同じで、たらし込みの先祖がえりともいえるでしょう。芳中は指頭画の延長でたらし込みを始め、そのたらし込みが光琳風と見なされたとも考えられます。たらし込みが光琳風としてもはやされ、『光琳画譜』が出版され、江戸へ下った芳中は光琳風の絵師として確立したのかもしれませんが。

[学芸員 伊藤紫織]



(図5) 中村芳中「雑画卷」部分 真田宝物館 ★



(図6) 酒井抱一「老子図」千葉市美術館



(図9) 円山応挙「富士三保図屏風」 千葉市美術館 安永8年（1779）



(図10) 長沢芦雪「松竹梅図」 千葉市美術館



(図7) 酒井道一「秋草図」 千葉市美術館



(図8) 鈴木鷺湖「漆・數柑子・桔梗図」 個人蔵



(図10) 長沢芦雪「松竹梅図」 千葉市美術館

関連イベント

■講演会「光琳追慕の系譜—光琳の江戸下りから抱一をつなぐ—」

講師：玉蟲敏子（武蔵野美術大学教授）

4月12日（土）14:00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

※当日12:00より11階にて整理券を配布

■特別市民美術講座「かわいい琳派 中村芳中」

講師：福井麻純（細見美術館主任学芸員）

4月20日（日）14:00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

※当日12:00より11階にて整理券を配布

■落語会「抜け雀」

出演：三遊亭良楽（落語家）

5月10日（日）14:00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

※当日12:00より11階にて整理券を配布

■市民美術講座「『光琳画譜』と中村芳中」

5月3日（土・祝）14:00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

講師：伊藤紫織（当館学芸員）



(図11) 中村芳中「山水図扇」より 太田記念美術館 ★

※作品キャプション内の★は本展出品作品です

光琳を慕う—中村芳中

2014年4月8日（火）▷5月11日（日）

【休館日】 4月21日（月）、5月7日（水）

【観覧料】 一般 1000(800)円、大学生 700(560)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※（ ）内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金

※前売券はローソンチケット（Lコード：39356）、セブンイレブン（セブンコード：027-430）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（5月11日まで）にて販売

芳中グッズも要チェック！

7階ミュージムショップがこの4月にリニューアルしました。これまで以上に展覧会にあわせたグッズをとりそろえています。芳中展ではオリジナルのトートバッグや、一筆箋、手ぬぐいからお皿（！）

まで、さまざまなグッズが集まりました。芳中作品の中でも大人気の「子犬」をモチーフにしたものがたくさんありますので、ファンの方は必見です。

ご来館の際はぜひお立ち寄りください。



春は爛漫

千葉市美術館所蔵版画100選

I 江戸の桜—浮世絵に描かれた春

春といえばまず桜を思い浮かべるという方は多いでしょう。日本では桜の開花情報というのが国民的関心事で、季節が近付けば天気図のような図面まで持ち出されて「桜前線」が報道されます。蕾の膨らみ、三分、五分、七分咲きなどと刻々と情報を得ては開花を心待ちにし、満開の桜を楽しんだ後にも、惜しみながら散り際の美しさを讃えるのです。

先だって終了した企画展「江戸の面影—浮世絵は何を描いてきたのか」(平成26年1月25日～3月2日)では、「花を愛でる人々」というコーナーを作り、花見の名所で思い思いに桜を楽しむ人々の姿を描いた江戸時代の浮世絵を中心に展示しました。花の下でのそぞろ歩き、酒宴を催し、また詩歌を詠んでは短冊を吊るすなど、江戸の人々は心から花を楽しみ満ち足りている様子です。実際、幕末・明治に来日した外国人の多くが、日本人の美德の一つとして、花を愛好する人々の姿について印象深く書き残しています。近年翻訳されて本も多く出ていますので、機会があれば読んでみることをおすすめしますが、このように広く庶民にまで花見の習慣が定着したのは、江戸時代ではなかったかと思います。

江戸幕府の事績には、上下水道を整備して都市の機能を整えるなど、人々の暮らしに根ざした政策が多くありますが、特にユニークなのは、それまで寂しいイメージの名所しかなかった新興都市である江戸に、桜を植えて花見の名所を作ったことでしょう。徳川家の菩提寺寛永寺を中心に花の名所となった上野は別格として、八代將軍徳川吉宗(例の“暴れん坊將軍”)が、主に町民のために飛鳥

山、隅田堤、御殿山といった場所に多くの桜を植えさせました。人々は年中行事のように花見を楽しみに出かけ、新しい都市への愛着を深めていったのであり、花を愛でる人々の姿は、多くの浮世絵に描き出されています。江戸の繁栄は、この地への親しみを核に熟成された文化や経済に支えられていたわけで、この意味でも花の名所造りは見事な政策であったと言えるかもしれません。

日本美術の中では、伝統的に季節の花が重要なモチーフとなってきたことは言うまでもありませんが、殊に桜は、芳醇な春のイメージを代表する花と言え、元来装飾的・デザインの傾向の強い日本美術の表現の中でも華やかな世界を演出するのに一役買っています。そして花見の名所を中心に花への愛好が高まった江戸時代に誕生した浮世絵においては、人と共に花が描かれるということに大きな意義があります。

今回の所蔵作品展では、「江戸の面影」とは違った切り口で、また会期に合わせて春から初夏の季節を満喫していただこうと、バラエティー豊かな版画作品を選びました。花を楽しむ人々の姿はもちろんのこと、芝居の中に演出される春、また春の草花など、様々な春を感じていただければと思います。「小さい秋みつけた」という童謡がありますが、中には「小さい春」も(?)。そして展覧会は江戸時代の浮世絵から近代版画に続きますが、ここで筆者を近代版画担当の学芸員にバトンタッチすることにいたします。

[学芸課長 田辺昌子]



(図1) 鳥居清広《初代中村富十郎の娘道成寺》宝暦3(1753)年



(図2) 鈴木春信《鞠と男女》明和4(1767)年頃



(図3) 北尾政美『来禽図彙』より 寛政2年(1790)年

II 光と闇と—近代版画に描かれた春

近代の作品に目を転じると、同じ春を描いても様相はかなり異なるようです。特に明治期の末以降、近代化のなかで培われた新たな感性は、春の楽しみや華やぎだけではない、より複雑な春の相をとらえるようになりました。めぐる季節を寿ぎ、陽春を謳歌する気分を引継ぐ一方で、春の憂愁や妖しさにも光が当てられた

のです。もちろん春愁という感情は近代以前にも意識され表現されていましたが、たとえば萩原朔太郎の詩に刻まれた悩ましく狂気をはらんだ春夜、あるいは梶井基次郎の小説「櫻の樹の下には」などを思いだすならば、春の美しく爛漫たるさまに逆に恐怖を感じるような、また闇を感知するからこそ光はより目映いというよ

うな、近代人の神経の一端が理解されることと思います。

そうした近代の版画において、春の表現はざっくりとふたつに分かれるといってよいでしょう。絵師と彫師、摺師の分業からなる伝統版画の世界では、季節感を何よりも大切にしてきた日本美術の流れをくんで、春の到来を喜び、咲く花を愛でる人々が描かれました。しばしば季節に先行して出版される言わば「春物」は、都市化してゆく国土をよそに、江戸の昔と変わらぬ人心と風俗を表現したのです。一例として明治42年3月15日に発行された山本昇雲の《今すがた 一枝》をあげておきます(図4)。満開の桜の一枝を手折ろうとする娘、その髪飾りや着物、帯には春の花々があまた盛り込まれ、来る季節への期待が横溢します。

かたや作家が自ら彫りや摺りを手がける創作版画の世界では、同時代の伝統版画を否定し、西欧の世紀末美術の影響下に出発した新しいメディアだけに、対照的な造形が数多く生まれました。長く続く桜の名所としておなじみの上野も、石版画家織田一磨の



(図4) 山本 昇雲《今すがた 一枝》
明治42(1909)年



(図5) 織田一磨《東京風景 上野之桜》
大正6(1917)年



(図7) 吉田 博《雲井桜》 大正15(1926)年

手にかかるこのとおり(図5)。花見客を黒々しい塊としてとらえ、咲き誇る桜樹を白々と不気味な、まるでもの狂おしく身をよじる獣のように描いています。永瀬義郎の木版画(図6)は一転してカラフルですが、タイトルに「濃艶」とあるとおり、花々は切られてもなお凄みのある、ただならぬ気配を漂わせています。彼らは伝統や定型から極力離れ、それぞれに個性的な春を表現しようとしたのです。

夜景が多いのも近代の特徴かもしれません。最後に紹介したいのは吉田博の《雲井桜》(図7)。吉野山に取材する本作は、20年以上前の水彩を木版にしたもの。洋画家・吉田博は40代半ばにして伝統版画に開眼し、彫り・摺りの高度な技に洋画の造形を融合させようとした人。54×71cmという木版画としては巨大な画面に、月光に浮かびあがる桜の老樹が近代ならではのリアルさで見事に写しとられています。作品の前に立つと心地よく湿った春の夜の空気に包まれ、香りまで感じるができそうです。

さてこの冬は、関東でも雪が多く、ことのほか寒い日が続きました。この文章を書いているのは3月上旬、未だ冷たい風が吹きやまず、今年は春の到来がひときり待たれるように思います。やがて訪れる本格的な春—重いコートを脱いで花見や散歩を楽しむとともに、展示室で、紙上に咲いたさまざまな春をお楽しみいただけましたら幸いです。

[学芸員 西山純子]



(図6) 永瀬 義郎《四季四態「濃艶」春》
昭和2(1927)年

所蔵作品展 春爛漫—千葉市美術館所蔵版画100選

2014年4月8日(火)▷5月11日(日)

〔休館日〕 4月21日(月)、5月7日(水)

〔観覧料〕 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名以上

※ 千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「中村芳中」展ご観覧の方は無料

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

2014年度上半期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時間] 14:00より(開場は30分前)

[場所] 11階講堂

[定員] 先着150名(入場無料)
※第1回は当日12:00より11階にて整理券配布

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますので、ご了承ください。

変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

○第1回 4月20日(日)	特別市民美術講座 「かわいい琳派 中村芳中」 [講師] 福井麻純(細見美術館主任学芸員)
○第2回 5月3日(土・祝)	『光琳画譜』と中村芳中 [講師] 伊藤紫織(当館学芸員)
○第3回 6月30日(土)	「あたらしいまなざし—大下藤次郎からはじまる風景画」 [講師] 藁科英也(当館学芸係長)
○第4回 7月26日(土)	タイトル未定(テーマ:浮世絵) [講師] 田辺昌子(当館学芸課長)
○第5回 8月23日(土)	タイトル未定 (テーマ:所蔵作品展「スモールワールド」) [講師] 松尾知子(当館学芸員)

◎ボランティアスタッフ4期生の活動スタート

美術館ボランティアの会は、新年度より新たに12名の仲間を迎えました。

約1年かけて行われた研修は、市内の施設ボランティア養成講座(千葉市生涯学習センターによる合同研修)にはじまり、美術館での専門研修へと進みました。専門研修終了時点で一人の脱落者も無く(!)、仮登録後は展示室内での現場研修に参加。そして、いよいよ活動開始です。ますますパワーアップした美術館ボランティアの今後の活躍にご期待ください。

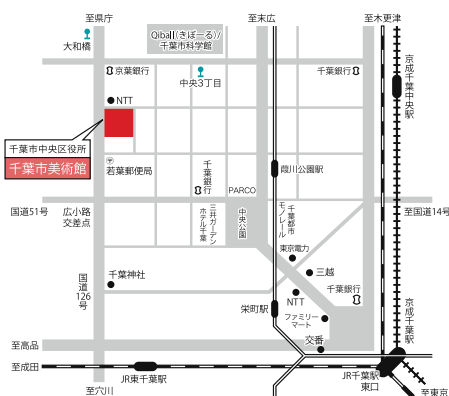


(上) 専門研修より、模擬ギャラリートークの様子

◎編集後記

今号は2014年度最初の展覧会である「光琳を慕う—中村芳中」についての特集です。中村芳中は、一般的にはあまり知られていない絵師ですが、描くモチーフのほのぼのとした可愛さ、フォルムの“ゆるさ”は初めて見る人でも微笑んでしまうような独特の味わいがあります。可愛らしさだけでなく今号のエッセイではその技術面についてご紹介しています。ぜひモチーフだけでなく描法にも目をとめて、芳中ワールドをご堪能ください。

[広報 磯野 愛]



[開館時間]

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[交通案内]

○JR千葉駅東口より

○徒歩約15分

○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて

「中央3丁目」下車徒歩3分

○千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分

○京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

○東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く

○地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733, Japan

http://www.ccma-net.jp/

[発行日] 2014年4月3日

[印刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

